

英語力の弱点を見極める

by

PERSONAL BUSINESS ENGLISH CONSULTING®



一概に、例えばリスニングが弱い、読む速さが遅い等と言っても、千差万別十人十色。

🚩 「リスニングが弱い」というのも…

- カタカナ音と本当の英語音とのギャップが激しすぎる
- ネイティブが発音すると、単語と単語がつながる
- ネイティブ発音と自分の発音とは、まるで異なっているので、何を言われているのか判別できない
- 聞き取った文が記憶できない
- 聞き取った文を頭の中で訳している間に次の文を言われてしまう
- 早すぎて追いつけない
- 語彙が少なく理解できない
- 意識が文尾に集中していて、主語と動詞を忘れてしまう

🚩 「読む速さが遅い」というのも…

- 単語で区切って読んでいる
- 単語ごとに訳しながら読んでいる
- 単語一つ一つを認識する速度が遅い
- 目を走らせるスピードが遅い
- 構文把握に手間取る
- 全文を訳してみないと意味がわからない
- 一文一文の意味はわかっても、次の文とのつながりが掴めないから、何度も読み返さなければならない

- 段落の積み重ね方が日本語と異なるので、文の流れが掴みにくい
- 日本語に訳せないような表現に戸惑って、全体の文意がわからなくなる

…と、弱点はそれぞれ。そして、各弱点にはそのまた原因があるのです。

ちょっと図を使って、外国語としての英語力と、学習者の弱点について、もう少し詳しくみておきましょう。

英語力を測るテストで、たとえば英検なら、5級から1級まで、まさに階段を上っていくようなイメージですね。

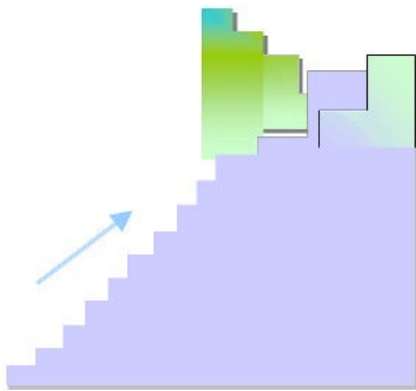
TOEICでも、

860点以上=A

730～860点=B

470～730点=C

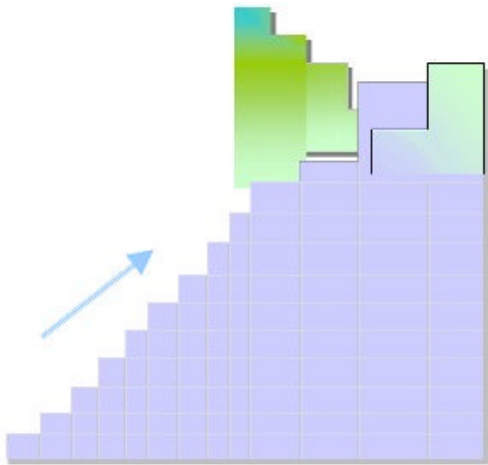
220～470点=D などというように段階的に英語力を把握するのが、日本では一般的です。



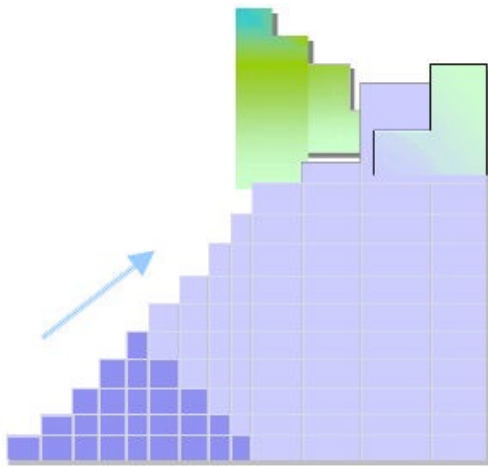
この図は、特に何で測ったということなく、単にイメージとして図示したものです。

上のほうにいくと、どんなふうに英語力を活用するかによって、方向が枝分かれしていきます。

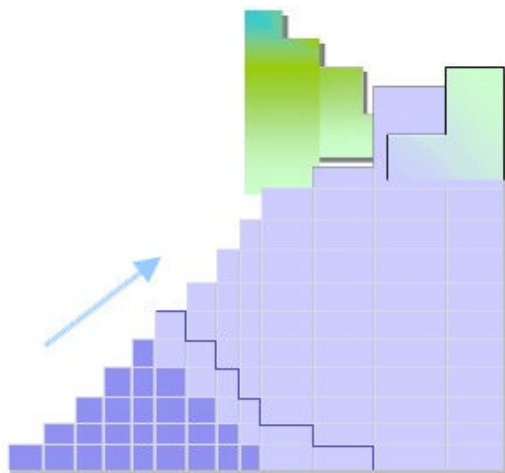
さて、この階段は、次の図のように小さなブロックを積み上げたものだと、イメージできるでしょう。



さて、たとえば今の実力を測ったら、下図の青紫の山に相当する程度だったとしましょう。



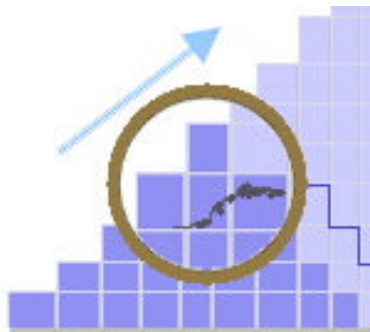
(もちろん、その日のコンディションや、テストの内容によって左右されますから、一度で実力を正確に測れるようなテストは存在しません。ちなみにTOEICの場合、一般的な背景をもった日本人の方が受験して、200点ほどの振れ幅が生じたとしても不思議ではありません。)



この人が、次のレベルを目指して（つまり紺色の線の領域を満たすように）力を伸ばそ

うとしているとします。

でも、なかなか思うように力が伸びない。よく見ると・・・



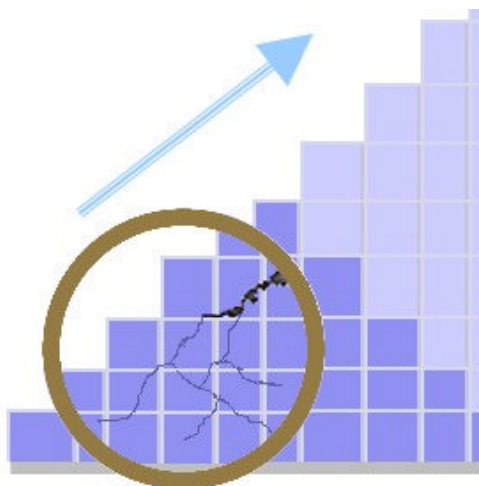
こんなふうに亀裂が走っていて、その上にいくら積み上げても、積み上げた途端に崩れていく・・・

「これが弱点だ！」と思うわけです。

たとえば、三単現の-s や複数の-s が認識できない、あるいは、品詞の認識が曖昧であるといったふうに。

しかしさらによく見ると、実はずっと下の基礎の部分から細かい亀裂が入っているのです。

それは、ローマ字読みやカタカナ読みの癖から、子音認識が欠如していたり、日本語直訳式に覚えていて、辞書を引いてもその中の意味を選んでしまう傾向にこそ、問題があったりするわけです。



これまで実際〈Q&A メール〉に寄せられた質問事例をもとに掘り下げてみましょう。

- 「英会話スクールに通おうと思うのですが、やはり毎日通ったほうが力はつきやすいでしょうか？」

このかたの本当の弱点は、学習方法と学習効果について、実践的な経験を基にした、ご自身に合った方法を見つけていないということです。たとえば受験英語は頑張ったけれど会話の練習はしたことがない、あるいは自習教材を購入して練習してみたけど長続きしなかったというような経験から、一念発起して、やはりスクールに通おう、どうせ通うなら毎日行かないとダメなのではないか、と思われているのではないかと想像できます。

基本的に英会話スクールのレッスンの中では、特にテキストを使う場合、レッスンごとに先へ進みます。復習をしなければ、どんどん忘れてしまいますから、毎日通って、毎日通ったなりの成果を上げるには、毎日何時間か自分で復習しなければなりません。それでも、3日経つとほとんど忘れると言われますから、さらにそれを忘れないための復習時間をとらなければならなくなります。これは、たいへんですよね。それよりも、1週間に1回くらいにして、復習に充てるべき時間をあとの6日に振り分けたほうが、効果的です。私は、毎日5分から15分程度の復習をお勧めしています。これなら、忙しくても何とかかなりそうな時間ですよね。学習効果も、何時間も集中した場合よりはるかに持続します。

- 「TOEICで、リスニングはいつも400点くらい、リーディングがどうしても300以上に伸びません。何が原因で、どうしたら目標の750点に到達できるでしょうか？」

このかたの場合、耳から入ってくる情報はある程度正確に理解できるけれど、眼から入ってくる情報については、不正確か遅いか、あるいはその両方だと考えられます。時間内に問題にすべて答えているか、それとも、最後のほうは当てずっぽうでただマークしているだけか、どちらでしょう？

すべてちゃんと考えて答えているのに伸び悩んでいるとすれば、読解力の基礎となるどこかに原因があるので、それを特定して克服しなければなりません。

時間が足りないのだとすれば、読む速度の問題ですね。速く読むトレーニングが必要です。音読をして、音読している単語の上に眼が止まっていないか、確認する必要があります。

もう一つ、どちらの場合にも共通する根本的な弊害が考えられます。それは訳し読みです。英語を英語のまま理解するのではなく、いったん頭の中で訳してから理解する癖があると、時間も遅くなりますし、意味内容を捉えるうえでも不正確になります。

いずれにせよ、そうした原因を着実に克服することで、750点といわず、800点でも860点でも取れるようになるのです。

- 「電車の中で聞いてるだけで力がつくという教材が出てますよね。あれは本当に力がつくんでしょうか？」

こういうかたの本当の弱点は、言葉の学習について客観的に考えになっていないということです。母国語をどのようにして身につけたかということを振り返って、学習方法を客観的に見直していくことは、外国語を身につける上でとても重要です。もちろん、母国語と外国語とでは習得していくプロセスにも根本的なところに相違があります。吸収する年代もそうですが、母国語という比較対照するものがあるのとないのとでは、理解の仕方が異なるのです。

確かに、まったく英語を聞かないよりは、はるかに力がつきます。文章を訳しながら読む癖のある人にも効果的です。また、耳から入ってくる情報は、特にこれまで眼からしか情報を入れてこなかった人の脳には、たいへんいい刺激となります。

ただし、それだけでは、それなりの効果しか上がりません。言語能力は、読む、聞く、話す、書くの4拍子が揃ってはじめて、バランスのいい、本当に使える力になるものです。

しかし、日本人の大半は極端に英語を聞くということをしてきていないので、その側面を強化するという点では、バランスのいい力にするきっかけとしてたいへん効果的だといえるでしょう。ただ、薬事法的に言うなら「個人の感想であり、実際の効果を証明するものではありません」ということになりましょうか。

- 「クオリティ・コントロールは品質管理、タスク・マネジメントは作業管理と訳しますね。コントロールとマネジメントのどちらも『管理』と訳していいのですか？」

訳語は一つの単語に対して一つだと認識されている人は、意外に多いようです。しかし、発生も成り立ちも、基盤となっている「ものの見方」も異なる二つの言語で、一対一の対応ができるわけがありません。こういった質問の背景には、1対1の対応ができるという誤った認識以上に学習の妨げとなる原因があります。

それは、辞書を読まない、訳語を選んでしまう悪い癖です。辞書を読むと、いろんな訳語を並べてくれているのが分かります。それが全部、その単語に包摂されている意味なのですが、用途、つまり他の言葉との連関、文脈によってぴったりの日本語が異なるわけです。訳す際には、他の言葉とのつながりから全体としてどんなイメージの事柄を伝えようとしているのかを、捉える必要があります。そして日本語では同じイメージを伝えるのに、一番わかりやすそうな言葉の組み合わせ（日本語でも連関は大事です）は何だろうと考えるのが、訳すという作業なのです。ところが、訳語を選んでしまうと、その単語のもつ意味のイメージを捉えようとする努力はしないままです。これではいつまで経っても、外国語は身につかないのです。

- 「“Nice to meet you.”と“Nice meeting you.”って、使い分ける必要がありますか？あるとしたら、どんなふうに使い分ければいいのですか？」

不定詞の名詞的用法と動名詞はいずれも「～すること」と訳す、という受験英語で覚えたことが、しっかり身についているかたの質問でしょう。日本人にはとても多いのです。

to には→のイメージがあって、動詞の前についていると、未来のニュアンスをかもし出す場合があります。それに対し、ing は、動作が進行している様子を客観的に捉えたイメージがあります。客観的に捉えるには、その動作がすでに進行していることが前提になります。この「すでに」には、動作が終わってしまっている場合も含まれます。従って、Nice to meet you. には「これからよく知り合っていく期待感」が込められ、Nice meeting you. には「会ったという客観的事実に対してよかったという感想を持っている」という意味合いが込められます。厳密にこの分類に従えば、初対面の人と会ったときには Nice to meet you. その人との別れ際には Nice meeting you. と使い分けるのが、正確な使い方です。しかし、実際には、会ったときに Nice meeting you. と言ったとしても、もうすでに会っているわけですから、正しい言い方ですし、to の→のイメージは、その動作の目的性をかもし出す場合もありますから、何らかの目的があって会った場合などは特に、状況にも合っているということになります。

そして現実には、どちらをどちらの場合に使っても、なんら支障はありません。

問題は、このことを理解することではなく、to には→のイメージがある、ing は、動作が進行している様子を客観的に捉えたイメージがあるという根本的なことをすっ飛ばして、文法的に云々という覚え方をしているということにあります。

言葉を生きたもの、使える道具として身につけるには、こんな風に言ったらこんなイメージが伝わるという、言語の基盤となっているところをしっかりと捕まえる必要があるのです。

- 「子供に英語を習わせようと思うんですが、やはり小さい頃に始めないと、ダメですよね？」

このかたは残念ながらご自身は英語ができないのですね。そして、自分は小さい頃から始めなかったからダメなのだと思ってしまっているらしい。

確かに、脳みそがまっさらに近い状態のほうが自然な力として身につくのは事実です。しかし、日本人として日本語がしっかり身につく前に英語が入ってくると、脳みそは混乱します。それは、日本語と英語とでは、ものの捉え方も文の構成の仕方も異なるからです。

言語能力の発達には個人差がありますが、ほぼ身の回りのことや基本的な要求などを日本語で、正しい文の形で言えるようになるのは6歳くらいです。その前に、英語のように日本語とかけ離れた外国語に触れさせると、素晴しくどちらの言語にも長けた子に成長することは稀で、かわいそうなことにどちらの言語もたどたどしくなる場合が多く、最悪の場合、論理的思考能力などの発達を妨げるような弊害にもなります。

どちらを母国語とさせるか明確にした上で、母国語の基盤(読む、書く、話す、聞く)ができてから、触れさせるのがよいでしょう。

さて、このかたの問題、大きくなってからでは身につかないという認識についてです。大人になってから乗り越えにくい壁としては、日本語にない子音の聞き取りがありますが、それも、正確に発音することを繰り返していくと、かなり克服できます。それは、本来脳みそに、自分の発している声をチェックする機能が備わっているからです。それを十分に意識して、要するに正しく訓練していけばいいのです。

弱点とは、その部分を克服すれば総合的・全般的な力を伸ばすことができるようなところのことですね。表層的なことではなく、根本原因に光を当てて、それをどのようにすれば克服できるか、ということ、その人それぞれの性格や様々な制約にぴったり合った方法で行なっていくことが必要です。

様々な制約ということに関して、こんな質問をもとに考えてみましょう。

- 「通勤に使う駅の近くには、NO▽△とA□○□とB□□□□□の3つの英会話スクールがあるのですが、私にはどのスクールがお勧めですか？」

スクール選びで重要なのは、普段の生活圈、通勤通学ルートから外れないこと。それは通常の生活で使うスキルを身につけるためだからです。通常の生活の範囲の中に英語学習の環境を構えることは、気持ちの上でとても大事なことです。

そして、自分のフィーリングに合わないところでいくら頑張っても、言葉の力は身につかないものです。脳みそが拒否するのです。ですから、近いというだけでなく、同じビルには他にどんなお店や会社が入っているか、といった細かいことまで観察して、実際にご自身が通うところを想像し、一番自分に合ったところを選ぶのがいいでしょう。

かつてはそれぞれにカラーを濃く出していましたが、最近はテキストの違いと、細かいサービスの名称の違いくらいで、客観的に見ると大差はありません。同じスクールでも場所によって受けられるサービスが異なることもあります。たいていは無料のサンプルレッスンをしてくれますから、教室の雰囲気、どんな講師を揃えているか、自分のわがままを聞いてもらったらどれくらい高くなるか、といったことを、リサーチしなければなりません。

受講できる時間帯も、料金体系も OK なら、英語ではできない質問をどう解消してくれるかという点に絞って選ぶというのも一つです。日本語でしかできない質問を抱えたまま、その質問を英語でできるようになるまで英語力をつけるって、考えただけで気が遠くなりませんか？